近代アメリカにおけるイギリスの出自とフランスの手法

カレッジイト・ゴシックの成立に関する史的研究(その1)

THE FRENCH OXFORD IN MODERN AMERICA

A historical inquiry into the Collegiate Gothic Movement in the late 19th century – part I

江 本 弘*

Hiroshi EMOTO

The Collegiate Gothic movement in America that emerged from the early 1890's marked the last phase of the inclusive Gothic Revival movement in the country and became a part of the movement for college planning known as "College Beautiful". The extensive development of colleges was made necessary and possible by the combination of demand and wealth created by the Gilded Age, as well as by architectural strategies introduced through the Chicago Columbian Exposition of 1893.

The Collegiate Gothic brigade, while searching for its main reference points in the English collegiate tradition of Tudor Gothic as opposed to Victorian Gothic, ended up mingling the Oxford-Cambridge building system of quadrilateral plan with the Beaux-Arts system of extensive landscape planning with axis and symmetry, within the American setting of broad college campuses.

Keywords : American Architecture, Gothic Revival, Collegiate Gothic, College Beautiful, city planning

アメリカ建築, ゴシック・リバイバル, カレッジイト・ゴシック, カレッジ・ビューティフル, 都市計画

1. はじめに

狭義のカレッジイト・ゴシックとは、およそギルデッド・エイジ末の1890年代初頭から1920年代末の世界恐慌ごろまで、アメリカの大学建築で主流のひとつを形成したゴシック様式を指す。

この様式の発展を通史的に考察した先行研究には G・パットン、C・ロス、P・C・ターナーらの先行研究(参考文献1~3)があり、特にターナー研究はアメリカの大学建築全般の歴史的展開を論じた浩瀚な通史として、以後の研究の重要な参照点であり続けている。ロスの研究は取り上げる作例こそ少ないものの、ゴシックの校舎の作例を大学建築として類型化せず、国内のゴシック・リバイバルの潮流一般のなかに組み込んだ意欲的な試みである。ほか個別研究としてのカレッジイト・ゴシックのキャンパス史も1980年代から現れるようになったが、この特定分野の歴史研究は今なお充実しているとはいえない。

ただし、このように乏しい研究史のなかでも、術語の定義にまつわる認識は深まったといえる。パットンの段階では、アメリカのカレッジイト・ゴシックとは、イギリスのチューダー朝・初期ステュアート朝の大学建築の模倣を主要素とみなす、様式的に厳密なものだった。しかしその後のターナー研究は、対象年代におけるアメリカのゴシック・キャンパス計画が「ある種の中世主義と古典主義の和解」の過程を辿ったことを、豊富な事例をもとに例証している。ターナーは、中世イギリスの修道院生活を範とした中庭型校舎であることを狭義のカレッジイト・ゴシックの第一要件としながらも、

「アメリカの大学のゴシック建築の図像的意味はある時には入り組んだものである」ことを示したのである¹⁾。

ターナーの研究によって、対象年代のゴシックの校舎がアメリカのキャンパス計画史にもつ共時的な意義は明らかとなった。一方通時的には、このカレッジイト・ゴシックの動向は依然として、その直前のゴシック・リバイバルとは全く別個の、固有の背景を有する断絶したものとして描かれるのが常である。しかし、それまでも大学にゴシックの校舎は建てられており「長い伝統があることは立証されている」(パットン)。この事実を鑑みれば、19世紀末にゴシックの校舎がみせた表現の変化は、同時代的な原因と同時に、歴史的主体による歴史解釈および様式観の変化と併せて、それ以前の動向と連続した現象として考察されなければならない。

本論は、この問題意識からカレッジイト・ゴシックの成立を明らかにする試みである。ここで特に参照されるのは、カレッジイト・ゴシックに関係する19世紀末から20世紀初頭の批評、すなわち、19世紀中葉以降のアメリカ建築の展開を直近の過去に有し、かつ「カレッジイト・ゴシック」概念の形成と普及(あるいは批判)に直接関与した論客による言及である。そこには、同時代的なゴシックの表現を通じて彼らが過去と現代にいかなる関連性を見出していたかという、論壇形成の当事者による歴史認識が表現されている。

そのさい本論では「カレッジイト・ゴシック」の定義を広範にとり、「1890年代以降1920年代ごろまで、アメリカの建築論壇において“大学的なゴシック”であることが言及された建築およびキャ

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 博士後期課程・工修

Doctoral Student, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, The University of Tokyo, M.Eng.

ンパス開発全般」を指すこととする。無論、同時代の論壇のなかで取り上げられずとも、明らかにゴシック様式を採用した新しい校舎やキャンパス計画は存在する。しかし本論でそれらがカレッジ・ゴシックとして取り上げられる場合は、この様式をめぐる論争が下火となった 1910 年代以降の作例に限る。

本論文は 2 部構成をとる。その第 1 部となる本稿では、この広義の様式が、どのような歴史的展開のなかで、どのような特質を表現として有するようになったかを当時の論壇に辿る。その後第 2 部においては、このゴシック様式がアメリカ最後のゴシック・リバイバルとして論壇に果たした同時代的な役割について論ずる。

2. カレッジ・ゴシック前史

2.1. 大学建築におけるゴシック様式の発端

アメリカでゴシックの校舎が建てられはじめたのは 19 世紀初頭のことで²⁾、この様式が大学校舎のために一般的に採用されるようになるのは、30 年代から 40 年代にかけてのゴシック・リバイバル初期の現象である。この時期のゴシックの校舎には、A・J・デイヴィス [1803-1892] によるニューヨーク大学校舎 (1833) を筆頭とし、ハーヴァード大学 (ゴア・ホール, R・ボンダ設計, 1838)、イエール大学 (図書館, H・オースティン設計, 1842-45)、プリンストン神学校 (レノックス図書館, 1843)、ニューヨーク自由大学 (J・レンウィック・Jr. 設計, 1849) などが挙げられる。これらの中にはイギリスの名門大学で用いられたチューダー・ゴシックへの参照がみられる (Fig.1)。なかでもニューヨーク大学校舎は「原型であるオックスフォードやケンブリッジのカレッジ・ゴシックを十二分に思い起こさせる」だけの形式の類似はみられないものの、20 世紀初頭、建築批評家モンゴメリー・スカイラー [1843-1914] によって、アメリカにおけるカレッジ・ゴシックの出発点と見做された³⁾。

2.2. 50-70 年代：ラスキン影響下の大学建築

19 世紀末の回顧によって「アメリカの大学の建築は 40 年代以降ほぼすべてゴシック様式に明け渡された」⁴⁾と語られるように、80 年代までのアメリカの新築校舎は多くの場合がゴシック様式を採用した。しかし 40 年代末からはイギリスの批評家 J・ラスキン [1819-1900] の建築書『建築の七燈』(1849)⁵⁾がアメリカの建築論壇ではほぼ独占的な人気を誇ったため、大学のゴシックの表現にも、この時期のラスキン受容を反映した変化が起こった。ラスキンの建築論から特に模範とされたのは、『建築の七燈』や『ヴェネツィアの石』(1851-53)⁶⁾に示される、建材の自然色を装飾に活かした積石造のゴシック建築である。その応用例はヴィクトリアン・ゴシックのなかでも特にラスキニアン・ゴシックと呼ばれ、大学建築に限らず、教会を含む公共建築でも当時広く試行された。1850 年代以降でこれに分類される大学建築には、初期のものにノット・メモリアル・ホール (ユニオンカレッジ, E・T・ポッター設計, 1858-79) やストリート・ホール (イエール大学, P・B・ワイト設計, 1864) など数例がある。

建築批評に関しては、1853 年に発表された「大学建築に対する提言」⁷⁾が、大学建築に関してラスキンの建築論を援用した最初期の例である。ここで論者は『建築の七燈』の「奉獻の燈」「力の燈」「真

実の燈」の三原則を援用し、大ぶりの石材によって本格的な積石造で建てられたアラムナイ・ホール (イエール大学, デイヴィス設計, 1851-53) の「古のカレッジ・ゴシックの魂」を讃えた。

しかし、19 世紀アメリカの大学で建設活動が盛んになるのは、復員兵を含む生徒数の増加や産業資本家の富の増大をみた南北戦争終結後のことである⁸⁾。メモリアル・ホール (ハーヴァード大学, W・ウェア+H・V・ブランツ設計, 1866-78) やファーマン・ホール (イエール大学, R・スタージス設計, 1869) はこの新しい建設活動の嚆矢である。プリンストン大学 (カレッジ・オブ・ニュージャージー) は特にこの時期のゴシック的建築表現の実験場としての性格が強く、W・A・ポッターによるチャンセラー・グリーン (1871-73) をはじめとして、W・M・ハントのマレイ・シアター (1879) やマルカンド・チャペル (1881-82) など、明らかなラスキニアン・ゴシックを含むさまざまな積石造のゴシックが建設された。

2.3. 「大学らしさ」と統一性の欠如

しかしこれらの校舎群は、当時のアメリカ建築界一般の流行として、ゴシック・リバイバル一般の表現であることに止まった。それらは特に大学の校舎の表現として求められたのではなく、さらには個別の建築表現の実験としての性格が強かった。このため 19 世紀末以降、アメリカのゴシック・リバイバル一般の傾向として、論客は「ラスキンの長説法によって宣伝された『ヴィクトリアン・ゴシック』は概して『個性』を引き出すことをとりわけ重視し、礼讃や統一性を排除することさえあった」⁹⁾という点を非難の矛先とした。

また 19 世紀末以前の大学校舎の多くは、既存の校舎を含めた周辺環境とはほぼ無関係に、広大な敷地に独立して新築されていた。そのため 19 世紀末には、個別作品としての個性の強調と共に、この一体的なキャンパス計画の欠如も批判された¹⁰⁾。すなわち、前時代のキャンパスは「無計画に成長したのである。それぞれの建物が最も便利そうな場所、つまり最もよく見える場所に置かれた [...] 一体的な効果も、グループ・プランもない」¹¹⁾ものだった。

Fig.1 イエール大学図書館 (現ドワイト・ホール)

アメリカのゴシック・リバイバルは大学の敷地に広大な実験場を持った。しかし、そこで試行された表現形式は多様であり、当時のアメリカにはそれら同士に調和をもたらす設計手法が乏しかった。

2.4. 中庭型プランニングの発端とチューダー・ゴシックの復権

この状況の転機となったのは、1893年のシカゴ万国博覧会である。しかしそれに先立ち、のちのカレッジイト・ゴシックの特質となる幾つかの要素は70年代、80年代にすでに萌芽していたことは特筆される。

中庭型の一体的プランニング手法は、イギリス人のゴシック・リバイバル建築家W・パージェス〔1827-1881〕による、1873年のトリニティ大学計画案によってアメリカに移入されたものである。ここでパージェスは、巨大な中庭型校舎が一行に連なり、建物の長軸上に図書館および礼拝堂を戴く案を提案した。

スカイラーは本国イギリスから移入されたこの案に「オックスフォードの魂」¹²⁾を読みとった。しかしこの計画は70年代アメリカの大学としては規模を超過しており、予算も限られていたため一部の実現にとどまった。その後、この案を参照した同様の中庭型キャンパスは、のちの大規模なカレッジイト・ゴシック・ムーブメントの発端となる、シカゴ大学のキャンパスに実現される¹³⁾。

70年代に実現したカレッジイト・ゴシックとして他に特筆されるのは、C・C・ハイト〔1841-1917〕によるコロンビア大学のハミルトン・ホール（1879）である。これは、のちのカレッジイト・ゴシック建築を特徴づける、チューダー・ゴシック様式への回帰、色彩と装飾の抑制といった特質を備えていたという点において、後代の参照点となった。ポリクロームで装飾を重視したラスキニアン・ゴシックからの離脱という70年代のアメリカ建築界の一般的傾向を、ゴシック様式の範疇でいち早く試行したのがハイトである。

19世紀末のスカイラーは、ハイトによる1870年以前のあるコンペティション応募案を「ラスキネスク」にも関わらず禁欲的な表現で、ポリクロームでもないという点で記憶していた¹⁴⁾。そしてハイトはこのコンペティションののち、コロンビア大学校舎（1874）において、ブランク・ウォールを大胆に使用し、装飾を抑制することで、「ヴィクトリアン・ゴシックとしてきわめて異例な」¹⁵⁾表現を模索した。このような遷移期を経て、ハミルトン・ホールでは「厳密に“カレッジイト”な、とても興味深い建物で、昔に建てられた非常識な建物を囲み隠し」¹⁶⁾た。この段階においては、様式装飾は最小限にとどめられた。

この校舎は鉄道敷設に伴うキャンパスの移転によって竣工間もなく取り壊されることとなった。しかしハイトがここで導入したチューダー・ゴシックは、その後のカレッジイト・ゴシックの建築家たちの参照点となり、自身やコープ&スチュワードソンの設計をはじめとして、19世紀末以降のアメリカに多数実現することとなる。

こうしてハイトは、20世紀初頭には「この国でゴシック・カレッジイト様式を最初に導入した」¹⁷⁾人物とも見做されるようになった。

3. カレッジイト・ゴシック・ムーブメントの背景

3.1. 大規模キャンパス計画の要因

1890年代に入ると、大学キャンパスにおけるゴシック建築はそれ

までの個別的な建設から様変わりし、中庭型を基調とした一体的な「キャンパス計画」として構想・実施されるようになる。一般的な現象として、大規模なキャンパス開発はこのギルデッド・エイジ末期からはじまるが、これには、この時期の大学経営の状況を取り巻く3つの大きな要因が影響していた

第一に、南北戦争以降における、高等教育機関の学生数の大幅な増加が挙げられる¹⁸⁾。アメリカで学生数の統計がとられ始めたのは1869年のことだが、その時点で6万人程度だった学生は1890年頃には3倍弱となり、1900年時点では24万人に達そうとしていた。これと並行して教育機関の数も増していったが、その後も続くこの指数関数的な学生数の増加には対応しきれなかった。学生収容の問題は、実質的な問題として大学経営の要だった。

また次に、19世紀末以降の校舎の建設は、ギルデッド・エイジに生まれた資本家の莫大な額の寄付金に支えられていた¹⁹⁾。19世紀中葉以降の商工業の発達に伴い、慈善家が高等研究機関の設立や寄付に投ずる金額は非常な勢いで増加していった。E・コーネルによるコーネル大学設立（1865）からL・スタンフォードによるスタンフォード大学設立（1891）のあいだに、彼らが投入する私財は指数関数的な増加をみせ（50万ドルから2千万ドル）、カレッジイト・ゴシック最初の一体的キャンパス開発例となったシカゴ大学も、J・D・ロックフェラーから3千万ドルの寄付を受けている。他大学においても19世紀末以降の寄付額は大幅に上昇した。大規模な建設活動は、このような経済状況によって可能になった。

3.2. 「カレッジ・ビューティフル」とカレッジイト・ゴシック

学生数の増加と、それに対応しうる建設費の獲得は、当時の大学キャンパスに開発の必要性和可能性を与えた。そうして、この機会に実質的な手段を与えたのが、1893年のシカゴ万国博覧会で採用された都市計画手法である。このイベントを期に、エコール・デ・ボザール由来の、軸性と対称性を基調とした大スケールの幾何学的設計システムはアメリカで大々的に実施されるようになった。

この手法は国内開催の博覧会の多くで用いられるようになり、市井の建築活動においては、この万国博覧会でもたらされた都市計画手法を活かし、大規模な街区開発を目的とする「シティ・ビューティフル」ムーブメントが始まる。そうして、アメリカのキャンパスに「ランドスケープ・アーキテクチャー」²⁰⁾の必要性が叫ばれ始めたのもこれとほぼ同時期のことである。このとき、従来個別に無秩序に建てられてきた校舎群への反省として、「建物と建物、また建物と敷地の自然環境を調和させること」を目標とした「カレッジ・ビューティフル」ムーブメントが始まった²¹⁾。アメリカにはそれまでもヴァージニア大学（T・ジェファーソン設計、1817-26）を筆頭とする幾何学的キャンパス計画は存在した。しかし万国博覧会の「ホワイト・シティ」に用いられた手法は、それまでの手法でキャンパス計画に対応できた規模をはるかに超えており、複雑な計画にも対応することができた²²⁾。

このように、19世紀末以降のアメリカの大規模キャンパス開発は、需要、資本、方法という3要件が揃ったことで生まれたムーブメントだった。ただしその最初期には、ボザールの計画手法とカレッジイト・ゴシックの建築表現はまだ融和していなかった。

シカゴ万国博覧会は、それまでのゴシック・リバイバルの盛隆から、ボザールを範としたフレンチ・ルネサンスあるいは古典主義への転換点であり、その潮流はコロンビア大学の移設キャンパス（マッキム、ミード&ホワイト設計、1893-1900）を嚆矢として、大学キャンパスの様式選択や設計手法にも影響を及ぼした。

しかしここで特筆されるのは、この時期にも、大学建築や教会建築では依然としてゴシック様式が尊ばれていたという事実である。この点において、19世紀末のカレッジイト・ゴシック・ムーブメントは1830年代以降のゴシック・リバイバルの延長線上にある。シカゴ博覧会と前後して、世俗建築、特に公共建築にゴシック様式が採用されることは少なくなったものの、「その間にも、大学建築に関してゴシックは相応しくないと考えていたのは、新しいフランス式建築を実践する最左翼だけだった」（スカイラー、1911）²³⁾。

4. カレッジイト・ゴシックの特質

しかし19世紀末以降のカレッジイト・ゴシックは、建設予算の爆発的上昇のほか、ヴィクトリアン・ゴシックからチューダー・ゴシックへの移行や、イギリスの中庭型校舎に対するフランスのボザールの計画手法の導入をみたという点において、それまでのゴシック・リバイバルとは一線を画していた。

4.1. イギリスの出自

それまでのゴシック・リバイバルを主導していたのはヴィクトリアン・ゴシックだったが、これは20世紀初頭の感覚からすれば「特に広範囲を指す言葉であり、非常に自由で『折衷的』」（スカイラー）²⁴⁾な術語だった。これは、その過去の建築家たちが、ときにゴシックに限らない、歴史的、同時代的な様々な参照源を用いて現代的なゴシック的表現の可能性を模索したことに対する批判的言及である。

一方、カレッジイト・ゴシック・ムーブメントではそれに代わり、オックスフォード大学をはじめとするイギリスのチューダー・ゴシックが主な参照源とされた。20世紀初頭の批評によれば、こうして「イギリスのオックスフォード、ケンブリッジのカレッジイトの伝統」を伝える「これらのチューダー様式の建物は、アメリカの大学建築に新しい要素を導入し、着実に好まれるようになった」²⁵⁾。当時カレッジイト・ゴシック・ムーブメントを理論・実作の上で推し進めていた建築家R・A・クラム（1863-1942）はこの嗜好の発展について、1881年にアメリカに渡ったイギリス人建築家、H・ヴォーン（1845-1917）が手掛けた聖パウロ学園の教会（ニューハンプシャー州コンコード、1886-94）の影響も指摘している²⁶⁾。

この様式選択には、1) アメリカの知的ルーツがイギリスにあると見做されていたこと、2) 学問環境として中庭型が好まれたこと、3) ゴシック・リバイバル建築にも近代性の表現が見出され求められていたこと、などの複合的な要因があったが、カレッジイト・ゴシック・ムーブメント初期から批評において強調されたのは、このうちの最初である。1894年の『アーキテクチュラル・レコード』誌に掲載されたシカゴ大学の批評記事はこのムーブメント最初期のカレッジイト・ゴシック批評だが、ここで評者は、この大学の「建築様式は、ケンブリッジやオックスフォードなど、古いイギリスの大学をできるだけ想起させるように選択されている」²⁷⁾と語った。

その後もカレッジイト・ゴシックの源流をオックスフォード大学

にもとめる論考は多数現れるが、なかでもこのムーブメントの主要な論客である建築家クラムは、アメリカ白人のアングロ＝サクソンの出自およびキリスト教文明の伝統を背景にこの点を強調した。クラムにとって、「様式は歴史的、人種的関連から展開し […] なければ意味がない」²⁸⁾のであり、そのためアメリカの大学校舎は、「伝統的に我々のものである学校建築、すなわちパドヴァやヴィッテンベルクあるいはパリではなく、オックスフォードやケンブリッジの類型のものでなければならぬ」²⁹⁾だった。またクラムは、1912年の王立英国建築家協会の講演において、「我々は皆、半世紀前まで骨も血も伝統もイングリッシュ、むしろブリティッシュだったのだ」³⁰⁾と、カレッジイト・ゴシック・ムーブメントにおけるヴィクトリアン・ゴシックからの離脱とイギリスのルーツへの回帰を主張した。

4.2. 聖と俗

また中庭型の大学建築は、大学組織を世俗とは隔絶された宗教的コミュニティと見做す当時の思潮によっても支持された。これは、当時急速に発展を続けていた、自国の経済状況に対する自覚の反映である。当時のアメリカでは、自国の経済的自立を誇る機運が高まっていた一方で、その自負の延長として、自国の知的独立を求める動きもまた盛んだった。

「カレッジ・ビューティフル」ムーブメントは、シカゴ万国博覧会以後の「シティ・ビューティフル」ムーブメントと相補的なものとして、「単に商業的なだけではない」³¹⁾アメリカの文化的矜持を象徴した。その知的生活の明確な表現として、都市的喧騒を遮断する中庭型のキャンパス計画は最適な選択だった。すなわち、この中庭型の「配置の理由は、一度大学の土地に入ったあとにはできる限り学生から外部環境を排除すること、 […] シカゴのせわしい商業環境を学生の意識から追い払い、古来の大学建築にみられる、穏やかな品格をもつ特殊な雰囲気と彼をとりまくこと」だった³²⁾。

こうして中庭型の校舎は、イギリスのルーツを示唆することのほかにも、「単なる贅沢だけでなく、それらの校舎が象徴するもの全体」すなわち「科学、文学、宗教ほか、すべての知的文化」を意味する媒体のひとつと見做されるようになった³³⁾。

その後、アメリカの大学キャンパスに求められる隔絶性、静寂性が宗教活動や宗教コミュニティとの類推で語られるようになったのは、「アメリカ大学建築の展開」³⁴⁾が発表された1897年のことである。ここで論者のA・R・ウィラードは、「中庭のまわりに構成員を密集配置させ一体化させる」オックスフォード大学に言及し、「それら [の校舎] は、ひとりの主教のもとに集う英国教会コミュニティ同士のグループのように、一体となって建っている」と語った。それまで「そのような団結の概念はアメリカ [の大学] にはなかった」が、19世紀末以降のカレッジイト・ゴシック・ムーブメントではこの質こそが求められた。スカイラーによれば、「校舎がゴシックでなければならぬ」というのは、そこが宗教団体の活動場所にならなければならないという、ほぼ自明な一事による。 […] そうしてそれは、半ば教会のような、半ば住宅のような、中世において修道院建築に応用され、爾来『カレッジイト』の名で知られるようになったものようではなければならないということが、ほぼ同様に論理的に帰結する」³⁵⁾のである。

4.3. 界壁としての校舎

しかしカレッジイト・ゴシック黎明期のアメリカには依然として、イギリスの中庭型モデルに則りつつ、広大な敷地にゴシックのキャンパスを計画する新たな方法が欠けていた。

そうしたなか、広大なキャンパスに建物単体で「イギリス的」な修道院性をもたらす試みは、博覧会直後のコープ&スチュワードソンによって先駆的に試みられている。彼らは厳密な中庭型ではなく、俗と聖を隔てる界壁として、敷地境界に沿ったゴシックの校舎を設計することで、「昔の修道院の伝統に由来する」、「立派な入口から入り」、「連続した建物に完全に囲まれた」³⁶⁾ 中庭の効果を、キャンパス域の中に校舎単体で達成することに成功した。この試みの発端は、1894年に竣工したプリンマー大学のペンブローック・ホールである。また、その後プリンストン大学に実現したブレア・ホール（1897）は、鉄道駅と隣接するキャンパス域に修道院的性質をもたらし、イギリス的・修道院的な大学の理念をさらに直截に表現した³⁷⁾。

コープ&スチュワードソンが開発した壁体状のゴシック建築は、イギリスのルーツを示すものとして主にチューダー・ゴシックを採用し、建築物単体で広大なキャンパス域に聖域性をもたらすことができ、漸進的な開発が可能である、といった点において、カレッジイト・ゴシックによるキャンパス計画の展開を画期した。建築史家A・D・F・ハムリン〔1855-1926〕は1903年、「アメリカの新しい大学建築は、個々に建てるというアメリカの伝統的なシステムに従う場合でさえ全体の統一と全体的効果を確保しようとしている」³⁸⁾と語ったが、コープ&スチュワードソンはときのキャンパス計画にそのための指針を与えた³⁹⁾。それは「マテリアリズムに対抗する囲壁都市」⁴⁰⁾として設計されるべきものとなった。

4.4. ボザールの計画手法の混交

その後間もなく、カレッジイト・ゴシックの大規模キャンパス計画にはボザールの計画手法が導入されるようになり、軸線をもちながら、「イギリス的」カレッジイト・ゴシックの中庭型校舎を単位としたキャンパス計画が現れる。この手法はまず、コープ&スチュワードソン自身によるワシントン大学計画（セントルイス、1899）によって試みられた。これは巨大な更地に計画された、敷地の長軸中心に明確な軸線が設定された直行グリッドの計画である。しかし、ペンブローック・ホール同様のチューダー・ゴシックの門の先からは軸線が左右に切り替わっていく操作がなされており、長軸におよそ線対称に配された中庭型校舎にも、対称形が崩され、歩者に対するピクチャレスクの効果が意図されていた。

そして同様の手法は、プリンストン大学整備拡張計画（クラム監修、1907-29）、リード大学（A・ドイル設計、1912頃）、デューク大学（H・トランパウアー設計、1925頃）等の計画でその後応用されることとなる。

このうち、クラムによるプリンストン大学の開発計画（Fig.2）は、コープ&スチュワードソンが現地に実現した手法の展開として、既存キャンパスで方向づけられた漸進的な開発の全体像を新たに示した。ここでは、最古の校舎であるナッソウ・ホール（1756）周辺に形成されていたキャンパスの核を活かし、この校舎を通る対称軸を設定して東西に中庭型の校舎が配置されている。また、コープ&スチュワードソンが開発した界壁状の校舎は、中庭型校舎を連続配置

しキャンパス域を囲う壁体にする、という手法へと展開した。

中庭型校舎を連続配置するこの手法は、以前のワシントン大学計画にも示唆され、その後のリード大学計画、デューク大学計画でも用いられている。しかし、後二者では軸線と対称性がさらに強調し、オープンスペースも巨大化した。また、その各々が長軸のアイストップにモニュメンタルな高塔を有した点も特筆される。1910年以降のカレッジイト・ゴシックの大規模キャンパス計画では、むしろボザールの計画手法の特質が目立つようになる。

Fig.2 プリンストン大学キャンパス計画

カレッジイト・ゴシックの新規性、妥当性が建築計画・建築様式の両面で盛んな議論となっていたのは1890年代初頭から1910年中葉までのことである。この段階を経た1920年初頭には、ボザールの手法を活かしたカレッジイト・ゴシックのキャンパス計画は、アメリカ国内においてすでに確立した手法として言及されるようになる。1922年、W・ヘーゲマンとE・ピーツは、自身の都市計画論のなかで「完璧に均衡がとれ、最良の現代思想に軸が合った」ゴシックは「ルネサンスの特質をもつ計画と必ずしも矛盾しない」と語った⁴¹⁾。ただしこの言及にもみられる通り、この段階に至っては、カレッジイト・ゴシックの特質はボザールの手法に従属すべきものになっていた。

5. 結語

アメリカにおけるカレッジイト・ゴシック・ムーブメントは、当時の経済発展に実質的な要件をもちながら、自国の知的独立の象徴として展開していった。そこではむしろ、それまで以上にイギリスの出自が求められることとなったが、そこに自国の地政学的特徴や、新たに持ち込まれた都市計画手法が混交することにより、イギリスの様式とフランス的手段の融合としての「アメリカ的」キャンパス計画手法が生まれた。「一団の建物と広大な敷地を有する形式は大学

として間違いなくアメリカ的」⁴²⁾であることが明示されたのは1907年のことだが、「イギリスの大学は中庭式であり、大陸の大学はひとつのモニュメンタルな大建築をもつ」⁴³⁾という両特性の融和は、この条件に対する回答としてそれ以前に長らく模索されていた。プリンストン大学計画にも示されるように、アメリカにおけるキャンパスの広大な敷地に秩序をもたらすためには、アングロ＝サクソンの出自を重視し当時のボザールの流行を辛辣に非難したクラム自身でさえ⁴⁴⁾、その手法の便宜には抗えなかった。

参考文献

- 1) Patton, G.: American Collegiate Gothic: A Phase of University Architectural Development, The Journal of Higher Education, Vol.38, No.1, pp.1-8, 1967.1.
- 2) Loth, C. and Sadler, J. T., Jr.: The Only Proper Style: Gothic Architecture in America, New York Graphic Society, 1975.
- 3) Turner, P. V.: Campus: An American Planning Tradition, The MIT Press, 1984.
- 4) Mackey III, E. J. and Wuennenberg, P. J.: Collegiate Gothic: An Architectural Overview, Mackey Mitchell Associates, 2001.
- 5) Lewis, M. J.: The Gothic Revival, Thames & Hudson, 2002.

注

- 注 1) Turner:1984, pp.117, 220. 以下、書名、記事名および本文の翻訳はすべて論者による。
- 注 2) アメリカの高等教育機関における最初期の例には聖マリア神学校のチャペル (M・ゴドフロワ設計, 1807) がある。Turner:1984, p.110.
- 注 3) Schuyler, M.: Architecture of American Colleges IV: New York City Colleges, The Architectural Record, Vol. 27, No.6, p.455, 1910.6.
- 注 4) Willard, A. R.: The Development of College Architecture in America, The New England Magazine, New Series, Vol.16, No.5, p.521, 1897.7.
- 注 5) Ruskin, J.: The Seven Lamps of Architecture, Smith, Elder, and Co., 1849. アメリカの海賊版も J. Wiley より同年に出版される。
- 注 6) Ruskin, J.: The Stones of Venice, 3 Vols., Smith, Elder & Co., 1851-1853. アメリカの海賊版は J. Wiley より 1851 年 (第 1 巻) および 1860 年 (全巻) に出版。
- 注 7) w.: One Suggestion to College Architecture, The Yale Literary Magazine, Vol.18, No.6, pp.240-244, 1853.5.
- 注 8) 「ジョン・ラスキンは大学建築は作らなかったようだが、それを作る人間を生んだ。州同士の戦争〔南北戦争〕のあと、1880 年に至るまで、新たなゴシックは彼の巨大な影響を表現した。それらは我が国の大学に反旗を翻したと言っていい。」Cram, R. A.: The Work of Cope & Stewardson, The Architectural Record, Vol.16, No.5, p.335, 1904.11.
- 注 9) Schuyler, M.: Architecture of American Colleges III: Princeton, The Architectural Record, Vol.27, No.2, p.148, 1910.2.
- 注 10) Schuyler, M.: Part III: Henry Ives Cobb, The Architectural Record, Great American Architects Series, No.2, p.85, 1896.2.; Hamlin, A. D. F.: Recent American College Architecture, The Outlook, Vol.74, No.14, p.792, 1903.8.
- 注 11) Githens, A. M.: The Group Plan V: Universities, Colleges and Schools, The Brickbuilder, Vol.16, No.12, p.219, 1907.12.
- 注 12) Schuyler, M.: Architecture of American Colleges VII: Brown, Bowdoin, Trinity and Wesleyan, The Architectural Record, Vol.29, No.1, p.160, 1911.1.
- 注 13) Turner:1984, p.219.
- 注 14) Schuyler, M.: The Works of Charles Coolidge Haight, The Architectural Record, Great American Architects Series, No.6, p.2, 1899.7.
- 注 15) Ibid., p.4.
- 注 16) Schuyler:1910.6, p.446.
- 注 17) Githens:1907, p.225. 一方シカゴ大学は、中庭型のカレッジイト・ゴシックによる一体的なキャンパス開発の嚆矢であったものの、フランスの設計手法が目立つと見做されたために主要な参照源とはならなかった。

Schuyler:1896, p.85; Cram, R. A.: Recent Collegiate Architecture, The Brickbuilder, Vol.23, No.11, p.259, 1914.9 を参照。なおスカイラーは、パージェスのトリニティ大学計画案もまた「フランス的」だとしている。Schuyler:1911, p.160.

- 注 18) Snyder, T. D., ed.: 120 Years of American Education: A Statistical Portrait, U.S. Dept. of Education, Office of Educational Research and Improvement, National Center for Education Statistics, p.75, 1993.
- 注 19) Brubacher, J. S. and Rudy, W.: Higher Education in Transition: A History of American Colleges and Universities, fourth edition, Transaction Publishers, p.377, 2008.
- 注 20) The College Beautiful, The Nation, Vol.77, No.1988, p.109, 1903.8.
- 注 21) Ibid., pp.108-109.
- 注 22) なお、キャンパスのボザールの計画手法は、F・L・オルムステッドらによってシカゴ万国博覧会以前にスタンフォード大学のキャンパス計画 (1887) で先駆的に試みられている。Turner:1984, pp.169-172.
- 注 23) Schuyler, M.: The Work Of Cram, Goodhue & Ferguson, The Architectural Record, Vol.19, No.1, p.87, 1911.1.
- 注 24) Schuyler:1910, p.149.
- 注 25) Githens:1907, p.219.
- 注 26) Cram, R. A.: Recent University Architecture in The United States, The Architect & Contract Reporter, p.335, 1912.5.24.
- 注 27) Jenkins, C. E.: The University of Chicago, The Architectural Record, Vol.4, No.2, p.240, 1894.10-12.
- 注 28) Cram, R. A.: Architecture in America, Gothic Quest, Doubleday, Page & Company, p.157, 1915 (first published in 1907 from The Baker & Taylor Company).
- 注 29) Cram, R. A.: The Work of Cope & Stewardson, The Architectural Record, Vol.16, No.5, p.415, 1904.11.
- 注 30) Cram:1912, pp.333-334.
- 注 31) Hamlin:1903, p.799. この点について、中庭型カレッジイト・ゴシックの最初の実現例であるシカゴ大学のキャンパスが博覧会の敷地に隣接し、その委員の多くが博覧会委員との兼任だったことは特筆すべきである。また当時の報告では、シカゴはアメリカの巨大な経済発展に加え、「過去四半世紀の切迫感が可能とした以上の、さらなる知的生活を表現することができる」都市だとされた。Block, J. F.: The Uses of Gothic: Planning And Building The Campus of the University of Chicago, 1892-1932, University of Chicago Library, p.3, 1983 および Herrick, R.: The University of Chicago, Scribner's Magazine, Vol.18, No.4, p.401, 1895.10 を参照。
- 注 32) Jenkins:1894, p.240.
- 注 33) Hamlin:1903, p.799.
- 注 34) 注 4 参照。
- 注 35) Schuyler:1899, p.14.
- 注 36) Hamlin:1903, p.792.
- 注 37) この点は当時の批評でも指摘され激賞された。Schuyler:1910.2, pp.156-157 および Cram:1912, p.335 を参照のこと。
- 注 38) Hamlin:1903, p.792.
- 注 39) 類似の特徴的試みは、ヴァンダービルト・ホール (ハイト設計, 1894) を端緒とする同時期のイエール大学のキャンパス改造にもみられる。Turner:1894, p.218 ではヴァンダービルド・ホール建設前後の区画平面が比較されている。
- 注 40) Cram, R. A.: Princeton Architecture, The American Architect, Vol.96, No.1752, p.24, 1909.7.21.
- 注 41) Hegemann, W. and Peets, E.: The American Vitruvius: An Architects' Handbook of Civic Art, The Architectural Book Publishing, Co., p.115, 1922.
- 注 42) Githens:1907, p.219.
- 注 43) Ibid.
- 注 44) Cram, R. A.: The Case against the École des Beaux Arts, Gothic Quest, Doubleday, Page & Company, pp.297-319, 1915.

図版出典

Fig.1 Schuyler:1909, p.396.

Fig.2 Cram:1909, p.22.

THE FRENCH OXFORD IN MODERN AMERICA

A historical inquiry into the Collegiate Gothic Movement in the late 19th century – part I

*Hiroshi EMOTO**

* Doctoral Student, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, The University of Tokyo, M.Eng.

The American tradition of Gothic architecture in college campuses dates back to the 1830's, with the construction of the Tudor-styled building of New York University by A. J. Davis, which is regarded as one of the origins of American Collegiate Gothic, and a prototype of Oxford and Cambridge.

American collegiate architecture during the 60's and 70's was marked by the hegemony of Gothic, in particular Victorian or Ruskinian Gothic, represented mainly by the Memorial Hall (W. Ware and H. Van Brunt, 1866-78) in Harvard, Farnam Hall (R. Sturgis, 1869) in Yale, and Chancellor Green (W. A. Potter, 1871-1873) in the College of New Jersey. Despite being built within college grounds, these challenging buildings were not necessarily required to be “collegiate”; the activities of “gothicists” were not confined to the realm of collegiate architecture, and college architecture was merely representative of a general tendency in the American architectural scene. College yards therefore served as important experimental grounds towards the search for a “universal truth” based in Gothic architecture. Also remarkable is the fact that they were built individually, without consideration of preexisting constructions in the campus, as general plans were inexistent. These negative points would later be severely criticized by critics such as M. Schuyler, R. A. Cram, and A. D. F. Hamlin.

The sudden boom of the “College Beautiful” movement in the 1890's occurred contemporaneously with the “City Beautiful” movement, the cause of which was the Chicago Columbian Exposition of 1893. Then, American colleges had to accommodate the demands of an ever-increasing number of students, and the wealth of benefactors facilitated the extensive development of college yards; the impact of the Chicago Columbian Exposition, in conjunction with the geometrical planning method promoted by the École des Beaux-Arts, furnished the means to plan a campus as a whole. These three conditions —demand, capital, and means— worked together to accelerate the American Collegiate Gothic movement; its due starting point came as a part of “College Beautiful,” although it would have to wait for the amalgamation of the British notion of university and the French method of planning, through which the English collegiate ideal was keenly sought for.

Its domestic preconditions for architectural realization were: the quadrangular plan of Trinity College by English architect W. Burges (1873), through which the notion of comprehensive Gothic planning of college yards was imported to U.S. territory; the works of C. C. Haight, such as Hamilton Hall (Columbia College, 1879), which resumed the Tudor Gothic strand of collegiate architecture as opposed to the previous Victorian strand. Nevertheless, the Trinity scheme and the subsequent plan of the University of Chicago, with its aspects of French vastness, axiality and symmetry, would not come to be appreciated nor referred to as a model.

The American college quadrangular system was initiated by Cope & Stewardson in collegiate buildings such as Bryn Mawr (Penbroke Hall, 1894) and Princeton (Blair Hall, 1897), in the planning of which they articulated the division of sacred and secular spaces, by placing elongated buildings on the border between the campus and the outside world, conferring it with a bastion-like continuity and picturesqueness, as well as the atmosphere of olden English universities; in sum, they gave campuses the appearance of a half-completed quadrangle, in which one could seek a cloistered intellectual life. Then this abstract notion of English cloister would mingle with the Beaux-Arts method of large-scale geometrical planning, eventually develop into the amalgamation of axial and picturesque planning, as exemplified by Washington University in St. Louis (Cope & Stewardson, 1899) and Princeton University (Cram, 1907-1929), embodying the genuine character of the “American” collegiate campus.

(2016年6月8日原稿受理, 2016年10月19日採用決定)